

# 保育者養成における人形の活用

—腹話術的方法を用いて—

浜崎 由紀<sup>\*1</sup>

Practical Use of Puppet in Training of Child-care Specialists

Application of the Method Like a Ventriloquism

Yuki HAMASAKI

キーワード：保育者養成，人形，人形劇教育

## 1. はじめに

筆者は2015年度より、滋賀短期大学幼児教育保育学科（以下、本学とする）の「保育内容人間関係」の授業において、腹話術的方法を用いて人形を活用することを授業内容に取り入れている。「腹話術的方法を用いる」とは、いわゆるプロの腹話術師が演じるように腹話術の技術に重きを置いたものではない<sup>1)</sup>。腹話術の特徴である、演者一人が人形を操り、あたかも人形が話しているように演じるが、学生が人形を用いて子どもとかかわることに重点を置いている。

保育現場において人形を活用することの有利な点は、幼児の側が保育者に対して心を開くことが困難であっても、人形には素直に気持ちを表現することが可能であることである<sup>2)</sup>。そのため、保育者が、伝えたいことがらを直接子どもに伝えるのではなく、人形を介在することによって間接的に伝えることができるのである。例えば、普段なかなか保育者に心を開かない子であっても、虚構の世界を楽しむことができる幼児期の子どもは、友達のような存在として人形と話し始めることがある。他方、反抗的に振る舞ってしまう子どもであっても、人形が話す言葉であれば、直接保育者が話すよりも素直に聞くことができる場合もある。

以上のことから、保育者を目指す学生にとって人形を活用することは、子ども理解を深めると同時に、幼児が人間関係を深めるための手助けの方法を学んでいくと考える。

本稿では、人形を活用した授業を受講した学生の学びについて明らかにし、今後の授業の課題について検討したい。なお、腹話術的方法を用いて人形を活用する・演じることを従来の腹話術と区別して本稿では「腹話術」と記す。

<sup>\*1</sup> 滋賀短期大学 幼児教育保育学科

## 2. 先行研究

人形の活用として、代表的なものに人形劇があげられる。保育者養成においても人形劇を授業に活用する取り組みが見られる。その多くは、「児童文化」や「保育内容表現」等で表現活動の一つとして取り上げられている<sup>3)</sup>。他方、人形劇及び人形劇教育の実践と研究を結びつけたものとして、2006年から始まった京都女子大学発達教育学部児童学科における人形劇の取り組みを取り上げた米谷、棚橋、向平らの研究がある<sup>4)</sup>。これらの実践と研究は、2014年度まで継続され、筆者も2009年4月から2014年3月まで実践・研究体制を援助する立場として大学院生、大学院研修者時代にかかわった経緯がある。ここでの授業体制は、プロ劇団の専門家による人形劇の指導とそれを補佐する体制で、人形劇教育及び人形劇研究を専門とする教員、ラボラトリースタッフ、大学院生のティーチングアシスタント、大学院研修者などで構成される。京都女子大学の人形劇の取り組みに関する研究は、演技指導の中心的な立場であった専門家、丹下進の人形劇指導に関するものや授業で取り扱う人形劇作品の分析、人形劇の実習指導における保育学生の学びの軌跡から人形劇の質の評価を試みるなど、多岐にわたっている。しかし、「腹話術」に関しての学生の学びについては、論文の中で一部学生の感想が述べられているものの、詳しい分析までには至っていない。

その他、保育における腹話術人形に関する先行研究として、人形教材の保育利用に腹話術人形を活用した腰山豊の「人形教材の保育利用—腹話術人形の保育利用」<sup>5)</sup>がある。腹話術による効用とその考察について述べられているが、受講した学生の学びとの関係については述べられていない。

以上のことから、本稿では、「保育内容人間関係」の授業において、学生が「腹話術」の授業を通してどのような学びを得られたのかに着目したい。なお、「腹話術」に関する指導法については、京都女子大学での実践を土台として研究を積み重ねたいと考えている。

## 3. 研究方法

### I 自由記述の振り返り・感想から

2015年度「保育内容人間関係」を受講した本学の学生が、「腹話術」を取り入れた授業の最終回に以下の三点について自由記述した「振り返り・感想」の内容を分析し、その傾向を検討する。

- (1) 「腹話術」を演じてみた感想・反省
- (2) 他の学生の「腹話術」を観た感想・意見
- (3) 「腹話術」の人形制作について

### II 質問紙調査

質問紙によるアンケート調査を行う

(1) 調査対象および実施日

2015年度「保育内容人間関係」を受講した本学の学生で、かつ2016年度2年次で「教育実習事前事後指導」を受講した学生を対象とした。実施日は、2016年4月14日、授業終了直前に行った。

(2) 方法

質問紙調査を行った。質問紙の配布方法は、「教育実習事前事後指導」授業の終了直前時に配布し、即日回答・回収を行った。アンケート配布数は155、回収152（男子学生13名、女子学生139名）無記名・未提出3、回収率98%であった。

(3) 調査内容

質問紙の調査項目は下記のとおりである。

- ① 大学入学前に「腹話術」を人前で演じた経験の有無
- ② 「腹話術」を演じることは大変だったか。
- ③ 大変だと感じた内容項目について質問をした。（複数回答）
  - (ア) 人形作り
  - (イ) 台詞を覚えること
  - (ウ) 人形の動かし方
  - (エ) 演技すること
  - (オ) 練習時間を取ること
  - (カ) その他
- (カ) その他の項目については、記入欄を設け、自由記述とした。
- ④ 「腹話術」をマスターできたことをプラスだと感じたか。
- ⑤ 「腹話術」を実習先で演じたか。
  - (ア) 保育実習
  - (イ) 施設実習
  - (ウ) 実習先以外
- ⑥ ⑤の(ア)、(イ)で「はい」と答えた場合、次の⑦、⑧について質問をした。
- ⑦ 子どもの反応を感じることはできたか。
- ⑧ 子どもの反応を受けて、「間」を取ったり、声を大きくしたり、台詞の表現に気をつけるなどの工夫をしたか。
- ⑨ ⑤で「いいえ」と答えた場合、演じなかった理由について質問し、記述式で回答を求めた。
- ⑩ 保育・教育現場に就職したら、「腹話術」を保育・教育の中に取り入れて、子どもたちの前で演じてみようと思うか。
- ⑪ ⑩の理由について質問し、記述で回答を求めた。

#### 4. 「保育内容人間関係」と授業内容

「保育内容人間関係」は、幼稚園教諭免許状及び保育士資格取得において必修科目である。本学では、学生は1年次の後期に受講する。授業の概要は、「領域『人間関係』のねらい及び内容の理解を深め、人とのかかわりの重要性を総合的に学ぶ。さらに、保育実践に生かす活動を取り入れ、実践力を身につける。」である。

学生は「腹話術」の授業を通して、子ども理解を深め、幼児との人間関係を深めていくための手助けの方法を学ぶことを目標とする。

授業内容は、次のとおりである。

- ① オリエンテーション
- ② 領域「人間関係」のねらいと内容について理解する
- ③ 人との関わりに関する環境の変化について理解する
- ④ 乳幼児の発達と人間関係 (1) (0.1.2歳児)について理解する
- ⑤ 乳幼児の発達と人間関係 (2) (3.4.5歳児)について理解する
- ⑥ DVDを視聴し、「心育ての保育」について考え自分の意見を述べる
- ⑦ 遊びを作る中での人とのかかわりを理解する (1) 切り絵遊び
- ⑧ 遊びを作る中での人とのかかわりを理解する (2) お話づくり
- ⑨ 人との関わりを育てる保育の実践 (1) 人形劇鑑賞・人形制作
- ⑩ 人との関わりを育てる保育の実践 (2) 人形を使ったワークショップ
- ⑪ 人との関わりを育てる保育の実践 (3) 発表①
- ⑫ 人との関わりを育てる保育の実践 (3) 発表②
- ⑬ 家庭との連携について理解する
- ⑭ 連絡帳の意義と役割について考え理解する
- ⑮ まとめ (期待される保育者像について考え自分の意見をまとめる)

後期15コマの授業で、腹話術に充てる授業数は、9回目の授業から12回目の授業(⑨から⑫)の4コマである。人形は、本格的なものではなく、身近な長靴下を用いて制作する。既製品等あらゆるものが容易に手に入る時代にあって、身の回りにあるもので比較的簡単に人形を制作できることを知る機会は、学生にとってもよい経験であると思われる。このことは、将来、保育現場において保護者へも簡単にできる手作り人形を伝えることができる。

人形制作にあまり時間をかけない理由は、他にもある。他の学生の演技を観ることや自分自身が人前で演じることに重きをおくためである。



9回目の授業でまず、筆者が演じる「腹話術」を学生が鑑賞する。まずは、学生に「腹話術」の楽しさを体験して知ってほしいからである。実際、筆者が演じてみると、ほとんどの学生は、笑顔に変わり、笑い声が起る。子どものように無邪気な様子が直接筆者に伝わるのである。

次に、あらかじめ用意した材料を用い、学生自身が人形を制作する<sup>6)</sup>。

10回目の授業では、9回目の授業で制作した人形(写真1, 2)を用いて、人形の動かし方を学ぶ。10回目の授業の最初に、学生自身が制作した人形と向かい合い、目線に気をつけながら、人形と以下のように会話をする<sup>7)</sup>。

- ・作った人形と目線をあわせてみよう。
- ・人形に話ってみよう。
- ・他の学生の人形と自分の人形の目をあわせてみよう。
- ・人形どうしは話してみよう。



(写真1)



(写真2)

このとき、学生は恥かしい素振りを見せるものの、他の学生の様子も垣間見ながら、次第に人形に話しかけるようになる。次に隣同士の学生と向かい合い、人形同士で会話をする。会話することによって、ただ、口を動かして会話をするだけでなく、時間が経過するにつれ、人形同士触れ合わせながら、コミュニケーションに幅が広がるようになる。これは、自然発生的に学生の間生まれ、笑い声も発生した。このように動かないものとしての人形を自分で動かすことにより、遊ぶ楽しさやコミュニケーションをとることを体験してもらう。

以上のような導入の後、実際に人形を動かす「人形体操」<sup>8)</sup>をする。これは、人形の動きが自然にできるように人形を手にはめたまま手首を上下左右に回転させて練習するものである。次に、発声の練習を全員で行う<sup>9)</sup>。これは、観客つまり子どもを意識しながら言葉を届けることを学ぶためである。11回目の授業では、9回目に筆者が演じたものを再度、演じる。あらかじめ筆者が用意しておいた脚本<sup>10)</sup>(参照:脚本)を配布した後、学生は、脚本通りに演技の練習をする。その際、基本を忠実に演技するように指導する。これは、スポーツの世界でもあるように型を覚えて、基本を習得することに重きを置いている。型を身体で覚えることにより、学生の独自性・創造性を育む基礎となると考えるからである。その後、4~5名のグループに分かれ、グループ内で練習をする。授業の終わりに、次週、全員の前で発表することを再度確認し、授業外での練習を課題とする。「腹話術」の最終授業の12回目は、脚本を見ずに、全員の前で演じることを課題とする。これは、オリエンテーション時にも伝えているが、試験として実施する。人前で「腹話術」が演じられるように、次のことに意識して演じるように指導している。

保育者養成における人形の活用

- ① 声の大きさ（後ろの観客まではっきりと聞こえるか）
- ② 演技の際、演者と人形の区別をしながら、自然と会話ができているか
- ③ 人形と観客視線を向けているか

このように学生にとっては少し難しい課題を出すことにより、必ず習得しなければならないという意識を学生に持たせる。最後に、自分自身が演じたことを振り返り、感想や反省を文章にまとめる。さらに、他の学生の演技を観た感想や意見も文章にまとめる。

（脚本）「けんちゃんのごあいさつ」

（演）演者 （人）人形

（演）みなさん、こんにちは。今日は、犬のけんちゃんを連れてきました。

けんちゃん、あれ、なにしているの。

（人）ねてる。

（演）ねてちゃだめじゃない。けんちゃんの前にはね、たくさんのお友達がいるんだよ。

（人）ほんとうかあ

（演）ほんとうですよ。おきてごらん。

（人）どっこいしょ。わーわーわーすごいなあ。

（演）ねえ、すごいでしょ。みんなの前に出てきて最初にすることはなんですか？

（人）うーん、おやつを食べる。

（演）おやつなんか食べませんよ。ごあいさつでしょう。

（人）ごあいさつって、だれがやるんだ。

（演）だれがやるんだって、けんちゃんにきまっているでしょ。

（人）そんなのだれが決めた？

（演）だれが決めたって、けんちゃんがみんなの前に出てきたんだからけんちゃんがやるに決まっているでしょ。

（人）そうか、では、ごあいさつ。会場にお集まりの諸君！

（演）そんなおおげさなごあいさつじゃなくていいんだよ。もっと簡単で。

（人）本当に簡単でいいのか。

（演）いいですよ。やってください。

（人）みなさん、さようなら。

（演）それじゃあ簡単すぎますよ。

（人）どうやってやるんだ。

浜崎由紀

- (演) しかたがないなあ。じゃあ、私が教えてあげるからその後続けていってください。
- (人) いいぞー。早く言え。
- (演) ずいぶんいばっているね。それじゃあはじめるよ。
- (人) それじゃあはじめるよ。
- (演) それはいわなくていいの。えーっと。
- (人) えーっと。
- (演) それもいわなくていいの。滋賀幼稚園のよい子のみなさん
- (人) ほんとうかあ。
- (演) ほんとうですよ。よい子の皆さんこんにちは。
- (人) よい子の皆さんこんにゃくやあ。
- (演) こんにゃくやあじゃなくて、こんにちはでしょ。
- (人) よい子の皆さんこんにちは。
- (演) よくできました！
- (人) よくできました！
- (演) それはいわなくていいの。ところでけんちゃん、けんちゃんの好きな食べ物はなんですか？
- (人) ドッグフード。
- (演) そうか、ドッグフードか。他には？
- (人) トマト、かぼちゃ、ほうれんそう、ブロッコリー…
- (演) えらいねえ。野菜が好きなんだね。じゃあ、けんちゃんの好きなことはなにか？
- (人) 歌を歌う。
- (演) へえ、すごいね。じゃあ何か歌ってくれるかな？
- (人) ゆきやこんこん あられやこんこん ふってもふってもふってもふっても…
- (演) ちょちょちょちょ、いつまでふるの？
- (人) ふってもふってもまだふりやまぬ、犬は喜び庭かけまわるねこはこたつでまるくなる。
- (演) ちゃんとうたえるじゃない。
- (人) けんちゃん、すごいでしょ。
- (演) すごいねえ。

## 5. 結果と考察

### I 自由記述の振り返り・感想から

#### ①「腹話術」を演じてみた感想・反省

練習をして試験に臨んだと思われる学生は、次のような感想が見られた。緊張しながらも課題をもって取り組んだ様子が見える。

- ・みんなの前に出て発表するのは、とても緊張してセリフが飛びそうになり焦りましたが、大きな声で演じることが出来ました。腹話術というのは、一人一役ではないのでとても難しかったです。ちゃんと術者と人形の区別ができたのではないかと思います。演じているときに心がけたことは、私が話しているときは、みんなの方に目を向けるということです。(中略)人形の声をする時には、できるだけ口が開かないようにできるだけ犬が話しているように見えるよう心がけました。自分でも少し納得できるような演技ができました。

次の学生は、緊張しながらも楽しんで「腹話術」を演じている学生の感想である。子どもたちとのかかわりについても言及している。

- ・最初はかなり緊張して、手も震えていたのですが、やっているうちにだんだん緊張がとけてきました。やってみると結構楽しかったです。緊張で手が震えないようになって子どもたちとより楽しめるようになりたいと思います。

次の学生は、実際に自然に演じられるようになるには、どのような工夫が必要であるかを考え、反映させようとしている。そして、さらに練習を重ね、実習でも活用したいことが書かれており、向上心が見られる。

- ・本当に人形と話しているように見せるために、人形と話すときは、人形を見て話す。それ以外のときは、ちゃんと前を見て話すように心がけました。実際に演じてみて人前で演じるのは、こんなに緊張するのだとびっくりした。もっと練習して実習のときにできたらいいなと思いました。

他方、「腹話術」は難しく、人形の活用に対して否定的な意見もあった。

- ・とても難しかったし、セリフが飛んでしまいました。全然覚えられなかったし、覚えていてもセリフが飛んでいたかもしれないです。楽しいという思いでやろうとしていませんが、うまくできませんでした。

## 浜崎由紀

2度と腹話術がうまくなる気がしないです。腹話術が苦手・嫌いと思うようになりました。どうやったらうまくなるのか疑問に思いました。腹話術と自分のセリフと交互になるのは難しかったです。

少数の意見であったが、「苦手」「嫌い」と思っており、苦手意識が勝っている。基本的なことを習得することが難しかったようであるが、学生がいかに人形と楽しむかについて焦点にあてていくことが必要であると考えます。

### ② 他の学生の「腹話術」を観た感想・意見

他の学生が演じる「腹話術」を客観的に観ることにより、「腹話術」を演じるうえで何が大切か確認できていることがうかがえた。

- ・笑顔でやっている人は少し間違えても見ていてとても面白かったです。
- ・しっかりと覚えていた人とあまり覚えていなかった人の差がとてもあったなと思いました。しっかりと覚えられていた人は、大きな声で自信をもって演じていて見ていて楽しかったです。
- ・子どもたちの方を見て話している人の方が腹話術に引き込まれると感じました。
- ・実際の現場では、もし忘れてしまっても、その時の話の流れに沿ってアドリブで言うと子どもたちも違和感を感じることなく楽しむことが出来ると思いました。
- ・上手だと思った人は、本当に犬が活着ているみたいに見えて、対話が自然でした。そして、犬の目線が観客とあっていて、犬の口の動きも大きくてわかりやすかったです。また、術者と犬の会話で自分が犬と目を合わせたり、観客と自分の目を合わせたりしている人がいて、使い分けがしっかりできていて上手だと感じました。ゆっくり間をあけて大きな声で話している人はとても聞きやすかったです。犬に対する術者の突込みがやわらかい人もいました。とても優しいイメージで子どもにとってとても良いなと感じました。

台詞を覚えて演じることが、人形と演者が自然な会話を成立させ、自信をもって演じることが出来ることを理解しつつ、少々間違えても笑顔で接しながら演じれば、楽しいと感じている。さらに観客である子どもへの配慮にまで及び、台詞の言い方について「とても優しいイメージで子どもにとってとても良いなと感じ」たとあり、子ども理解へとつながる言及である。客観的に批評できる目を持ち、子どもへの理解も深めていることが読み取ることが出来る。

## 保育者養成における人形の活用

### ③ 「腹話術」の人形制作について

身近なもので人形制作ができることを知り、自分で作ることで不出来であっても人形への愛着が湧いたことを記している。制作環境について体験したことを踏まえ、保育現場でそれを反映しようとする姿勢が見られる。

- ・はじめは、正直「めんどくさい」と思っていたけれども人形が完成するに近づいて、「カワイイ」と思ったり友達とそのぬいぐるみで遊んだりしているうちに愛着が湧きました。私が保育者になったら子どもとぬいぐるみを作ってこのような気持ちが出来できるようにしたいと思いました。
- ・私はもともと手芸が得意ではないので、作る前からすごく不安でした。でも、いざ作ってなるときの先生がフェルトを切る台紙を用意してくれて、やりやすかったです。保育の現場でもこうやって、子ども達がやりやすい環境を整えることが大切なんだと思いました。私が作ったワンちゃんは結構不細工だけどなんだか使っていくうちに愛着が出て可愛くなってきました。靴下でこんな簡単に人形が作れるんだと思い、すごくいい方法だと思いました。すごく楽しかったです。

次の学生は、もう一体人形を制作し、遊びを広げていこうとする様子もうかがえる。このことが保育の現場に行ったとき、子どもの遊びを広げる援助者として力を発揮する。

- ・もう一体作って人形どうしの掛け合いができるようにするのも楽しかったと思いました。

また、手作りで簡単であっても、丁寧に作ることがよい演技につながると気づく学生もいた。

- ・練習の時に舌が取れたりしたので、しっかり縫うことが大切でそれが良い腹話術につながる一歩になると思いました。

以下の感想では、学生同士の学びあいも見られた。教員から教えられるだけでなく、学生同士教えあうことが、保育現場において保育者同士の人間関係にもつながることになる。

- ・人形の制作にあたってクラスの人とお互い教えあいをしながらできたことがよかったです。

#### (1) 質問紙項目

##### ① 大学入学前に腹話術を人前で演じた経験の有無 0名(0%)

大学入学前に腹話術を人前で演じた経験があるものは、一人もなかった。人形を使って子ども

たちと話すという経験があったかどうか定かではなく、「腹話術」と限定したことにより、0名であったかもしれない。しかしながら、学生にとって、人前で初めて「腹話術」を演じることは、難しかったと思われる。

② 「腹話術」を演じることは大変だったか。

(表1)

	人数(人)	割合(%)
はい	137	90
いいえ	12	8
無回答	3	2

演じたことがないという経験からもわかるように、学生にとって「腹話術」を演じることは大変だったと思われる。次に、④大変だと感じた内容項目(複数回答)についての結果は、「台詞を覚えること」(回答数66 割合35%)、「演技をすること」(回答数63 割合20%)、人形の動かし方(回答数38 割合38%)、人形作り(回答数11 割合6%)、「練習時間を取ること」(回答数8 割合4%)である。(表2)

(表2)

項目	回答数	割合(%)
台詞を覚えること	66	35
演技すること	63	20
人形の動かし方	38	38
人形作り	11	6
練習時間を取ること	8	4
その他	4	2

その他の回答は、多人数の前で演じること(1名)、人形と会話を自然にすること(1名)、人前で緊張する、緊張しながら行うこと(2名)であった。

「台詞を覚えること」、「演技をすること」、「人形の動かし方」上位を示しているように演技の技術面で難しいと感じる学生が多く、会話を楽しむことまでには至っていない。

人形作りに関しては、大変だと答えた学生は、回答数11(6%)で、比較的低い数値であった。このことは、90分の授業内で完成を目指す人形を用いたことで、本格的な人形を制作するハードルを低くできたと考えられる。

保育者養成における人形の活用

「⑤『腹話術』をマスターできたことをプラスだと感じたか」については、はい116名（76%）、いいえ27名（18%）、未回答9名（6%）であった。②で腹話術は大変だと感じたのが137名いたものの、大変と感じた学生の中で、腹話術をマスターできたことをプラスだと感じたのは、105名で、高い数値であった。

⑥「腹話術」を実習先で演じたか。

（表3）

	人数（人）
（ア）保育実習	10
（イ）施設実習	0
（ウ）実習先以外	9

⑦（⑥で（ア）（イ）で「はい」と答えたもの）子どもの反応を感じる事ができたか。

はい 10名

⑧（⑥で（ア）（イ）で「はい」と答えたもの）子どもの反応を受けて、「間」を取ったり、声を大きくしたり、台詞の表現に気をつけるなどの工夫をしたか。

はい 7名

他方、実習先で演じなかった学生について、質問⑨において演じなかった理由について記述式で回答を求めた。（複数回答あり）「機会がなかった・時間がなかった」（回答数68 割合52%）が過半数を占めた。（表4）

（表4）

項目	回答数	割合（%）
機会がなかった・時間がなかった	68	52
他のことがしたかった	19	15
自信がなかった・難しかった・緊張したから・台詞を覚えなさいといけない	15	12
やりたくなかった・やろうと思わなかった	9	7
準備が間に合わなかった	6	5
忘れていた	4	3
タイミングがわからない	3	2
その他	6	4



1年次の保育実習Ⅰでは、現場の先生方の実践から見て学ぶ「観察実習」が中心で、授業で行った形式で腹話術を演じる場面は少なかったと思われる。しかし、それでも保育実習先において授業で学んだことを生かした学生がいた。これらの学生は、腹話術をマスターすることは、演技や台詞、人形の動かし方において大変だと感じていた。それにも関わらず、演じていた。

⑦の質問（「子どもの反応を感じたことができたか」）では10名、⑧の質問（「子どもの反応を受けて、「間」を取ったり、声を大きくしたり、台詞の表現に気をつけるなどの工夫をしたか」）では、7名おり、子どもの前で演じたことによって、「人形を使って子どもに話しかけると、とても笑顔になり、反応がよかった」という記述がみられた。これらの学生はすべて、質問⑩（「保育・教育現場に就職したら、腹話術を保育・教育の中に取り入れて、子どもたちの前で演じてみようと思うか」）において、「はい」と答えている。学生たちは、実際に子どもたちの反応を目の当たりにし、今後も保育現場に取り入れてみたいという結果に至ったと思われる。全体的には、「はい」が106人（69%）、「いいえ」44人（29%）、わからない1人（1%）、無回答1人（1%）であった。（表5）7割近くの学生が「腹話術」を取り入れたいという結果が出た。このことから腹話術の活用について好意的に思っていることがうかがえる。

（表5）

	人数（人）	割合（%）
はい	106	69
いいえ	44	29
わからない	1	1
無回答	1	1

質問⑪で⑩の理由について質問し、記述式回答を求めた。（表6）（表7）

質問⑩（「保育・教育現場に就職したら、腹話術を保育・教育の中に取り入れて、子どもたちの前で演じてみようと思うか」）において、「はい」と答えた学生の5割以上が、「子どもが好き・喜んでくれるから」と回答している（回答数53 割合50%）。「腹話術」は、演じれば子どもは楽しむものだという認識である。「絵本などの導入にいいと思うから」等、導入としての「腹話術」（回答数13 割合12%）、「子どもとの距離が近くなるから」（回答数11 割合10%）、「面白さを伝えたい」（回答数7 割合7%）と続く。この結果からわかることは、子どもの視点から考えられた感想が6割を超え、実習先で子どもと直接接したことにより、実際の子どもの知り、「腹話術」と結び付けて考えたのではないと思われる。

一方、3割の学生が将来も「腹話術」をすることに否定的であるが、「難しい」「自信がない」など、技術的なことが十分でないために抱く感想ではないと思われる。

保育者養成における人形の活用

(表6)

項目	回答数	割合 (%)
子どもが好き・喜んでくれると思うから	53	50
絵本などの導入にいいと思うから	13	12
子どもとの距離が近くなるから	11	10
面白さを伝えたい	7	7
実践で学んだことを生かしたい	5	5
普段の遊びに取り入れられるから	4	4
子どもの反応を見てみたい	3	3
その他	3	3
無回答	6	6

(表7)

項目	人数 (人)
難しいから	12
自信がない	9
違うことをしたい	5
特になし	4
したくない	2
人形がダサイ	1
盛り上がらないと思う	1
未回答	10

## 6. おわりに

腹話術的方法を用いた人形の活用は、子ども理解や子どもとの人間関係を深めるための手助けの方法として、一定の学びが学生に見られた。「腹話術」の基本を習得するために脚本をもとに台詞を覚え、人前で演じることは、学生にとって難しい課題でもあったが、人形を用いることによって、その楽しさを知り、効果を認識したことで、保育現場で生かしていきたいという意見が7割近く見られた。さらに、学生自身の気づきが見られ、自分で考え、自発的に保育現場で活用していこうとする意欲が見られた。

「したくない」、「自信のない」学生については、技術的なことよりもまず第一に人形を使って遊び、学生自身が楽しいと感じ、子どもに伝えたいと思うことが必要であると思われる。今回の報告は、今後の課題について手がかりを得るための第一報としてまとめた。今後は、分析の方法や授業の方法等改善し、学生の習熟度を高める努力をしたい。

## 謝辞

本稿執筆にあたり、元京都女子大学教授、棚橋美代子先生にご指導を賜りました。「子どもと文化研究会」の諸先生方からもご教示賜りました。記してお礼を申し上げます。

## 注

- 1) 湯見英明が「人形劇の仲間たち腹話術の現在」(「子どもの文化」子どもの文化研究所 第44巻7号 p.104-107 2012)の中で述べている腹話術の流れの二つのうち「手品,マジックの世界から」の流れと「人形劇の中の腹話術」のうち、筆者が授業で用いる方法は、後者を示す。
- 2) 宮井清香, 安永啓司他「幼児期の人間関係の発達を促す遊びに関する実践研究－人形を用いた遊びに着目して」(「東京学芸大学紀要 総合教育科学系」62(2)p.297-304)
- 3) 岐阜聖徳学園大学短期大学部幼児教育学科では1966年の開学より人形劇制作を導入し、児童文化研究・発表に取り組んだものがある。人形劇制作には、脚本・人形・大小道具・効果音楽・照明効果の作成、人形操作の稽古・演出・広報・記録・脚本集の作成等一連の人形劇制作の過程を学ぶものであり、実践内容が多岐にわたる。
- 4) 米谷淳 棚橋美代子2006「丹下進の人形劇に学ぶ－京都女子大学『保育技能実習』の特色ある取り組み」神戸大学教育推進機構 大学教育研究 第15号／米谷淳, 棚橋美代子, 向平知絵「保育者養成における人形劇の活用－丹下進の人形劇指導－」(「京都女子大学発達教育学部紀要」4, p.29-39, 2008, /棚橋美代子, 浦野武治, 松崎行代, 浜崎由紀, 向平知絵「保育者養成と人形劇」(「子どもの文化」子どもの文化研究所 第44巻7号 p.40-47 2012等がある。
- 5) 日本保育学会大会研究論文集47, p.858-859, 1994 日本保育学会
- 6) 丹下進『人形劇をつくる』大月書店 p.61-62 に掲載されている型紙を参考に使用した。
- 7) 筆者が所属する「人形劇団わたげぐみ」の活動でメンバーの糸井嘉より受けた人形劇指導を参考にした。
- 8) 前掲6)p.26
- 9) 前掲6)p.63-65
- 10) 筆者は、「腹話術」を「人形劇団もぐら」代表浦野武治から指導を受けた。授業での脚本は、筆者が指導を受けた際、浦野が作成したものに断りを入れて一部改変したものをを用いている。